
バカと皮肉屋と召喚獣

キール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと皮肉屋と召喚獣

【Zコード】

Z1580Z

【作者名】

キール

【あらすじ】

ここ文月学園での学園生活。その中には『戦争』があつた。その戦争を駆け抜ける兄弟。これは、陽気でバカな兄と、皮肉屋で陰険な弟の学園ラブコメディ……かもしれない。（注）この作品は、ほかのアニメのヒロインも起用します（予定）ので、そういうのが嫌いな方は、回れ右で。

一話（前書き）

吉井家に、明久とまつたく正反対の弟がいたら？ と妄想しながら書きました。初心者ですがよろしくお願いします。

文月学園が注目されているその理由は、その斬新な教育の特殊性だろう。

生徒の所有点数に応じてその性能を変化させ、戦わせ合ひことのできる、元科学者である文月学園の学園長が生み出したその画期的なシステム。科学とオカルトの偶然なとつ組み合わせで生まれた、生徒のモチベーション向上のために組み入れられたそれは、この学園の特徴でもあった。

点数の上限無しのテストでどこまでも強くなる、『試験召喚獣』。そして、教師の立会いの下、行われるのが、『試験戦争』。

曰く、『下剋上』。

「でもさ今日は結構いけたと思つんだよね。僕的に手こじたえあつたよ、確かに難しかつたよ この僕でも さすが、振り分け試験だ。噂通りだよ。でも、十問に一問は解けたよ。A、Bとは言わないけどこか口はいつたよ」

「あー、そうかい。よかつたね。それは」

後ろに手を組みながら、ぼんやりと答える。吉井南雲は兄、吉井明久の話を上の空で聞いていた。桜の花びらが視界をふさぐように落ちてくる。目を細めながら、通りなれた道を見つけ、歩く。

花びらの雨が晴れると、目指す文月学園の門が見える。

吉井南雲が文月学園に入学してから、今日で一年目になる。着なれた制服は、彼の体に合つよくなつた。この一年、まあ、平和とはいかなかつたが無事に終わつた。

「遅いぞ、吉井兄弟」

門の前に突っ立っている、がたいの良い男。南雲は嘆息をついてその男へ近づいた。男は、彼らの去年の担任だつた。同時に天敵だつた。曰く、不俱戴天の敵だ。南雲は顔を見るや否や、去年までの激しい攻防戦が頭にかすつた。苦い顔を隠せそうになつたが、どうにか柔らかな声を出した。

「おはようございます。西村先生」

「お前は相変わらずだな」

「うるさいな。と口に出さずに反抗する。無言の反抗はこの男には通じない。誰に対してもそうだが。」
続けて明久。

「おはようございます鉄じ　じゃなくて西村先生」

「今、お前鉄人と言いかけなつたか？」

「氣のせいですよ」

南雲はすつ呆けるように、兄をフォローする。心中では明久に拍手喝采を送つてゐる。

西村教諭はトライアスロンを趣味しているため、もつぱら、鉄人と陰口をたたかれている。その趣味で鍛えた体を反つて、鉄人はふんと鼻息を鳴らして、見下ろすように兄弟を見やる。

「お前たちは俺に何か言つことはないのか？」

「黒いですね 肌が」

「黒いですね 体毛が」

兄と弟は口をそろえて似たようなことを呴いた。それに不服なのが、鉄人は片眉を吊り上げる。

「お前たち兄弟とは一度決着を着けなければならぬようだな……
ほら、受け取れ」

鉄人は脇に抱えてた箱から、おもむろに何かを取り出す。茶色い封筒を二つ取り出し、それを兄弟に渡していく。

明久がいぶかしげにそれを受け取り、眺める。そして、やがて思い出したように顔を上げる。南雲は興味が無いのか、つまんなそうに見ているだけだ。

「それにしてもこんな面倒なことしなくてもいいのに」

それには同意なのか、同じような表情で鉄人は明久のその呴きに相槌を打つ。

「普通はそうするんだが、まあつちは世界的にも珍しい試験校だからな。これもそういった一環なのだろう」

南雲は鉄人を見、何か考え込むように顎に手を当てる。

「……なるほど。コリラを教員に迎えているのもそいつた理由ですか」

「じつんつ。

「それはともかく……吉井（兄）、俺は去年お前を見ていて思ったことがある」

「なんですか？」

なぜか氣絶して、ぱたりと倒れた南雲を無視して話を進める一人。

「去年のお前の行動を見ていて、ひょっとしたら吉井は空前絶後のバカなんじやないか？ と思つたんだ」

「それはとんだ思い違いですね。誤解も甚だしいですよ」

自信たっぷりにそう告げる明久に、かぶりをふつて鉄人が謝罪の意を述べる。

「ああ、そうだな。俺の思い違いだつた……」

珍しい鉄人のその姿を、満足げに見送つて、明久は手元の茶封筒の封を切りにかかる。笑みを浮かべる鉄人に、不穏当なものを感じつつも、封筒の中身の折り畳まれた紙を取り出した。

「ああ、この結果を見て、お前への疑惑が晴れたよ」

明久が畳まれた紙を、開くのと同時に鉄人が告げた。

「お前は正真正銘の 空前絶後じじやない 絶滅危惧種級のバカだ」

鉄人の声は、もはや、明久にも、足元でぴくぴくとうごめいでいる（いつの間にか一人に踏まれていた）南雲にも聞こえてなかつた。

兄弟と教師の間に、春に合わない冷たい寒風が桜の花びらと共に吹きぬけた。

文月学園は学生ヒエラルスキーが激しい。勉強ができる者とそうでない者、激しく分類される。文月学園の学園長が昨今の学力低下へのパフォーマンスとして、取り入れた画期的な教育システムがそれだ。

そのシステムは、点数によって強さを変える『試験召喚獣』となり、生徒の分身となる。生徒たちはクラス単位で、その召喚獣を使役して戦う。

群雄割拠的なそれは、当然、熾烈な争いを生んだ。それが試召戦争。

曰く、『戦争』。

一話（後書き）

感想待つてます。

ほかのアニメのヒロイン起用はまだ予定です。煮え切らない作者で
申し訳ござれこません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1580z/>

バカと皮肉屋と召喚獣

2011年12月5日18時59分発行